

## 80. 活動成果の学術的情報発信：「Scientific Reports」誌 ②

(学外対応分)

### 実施時期又は期間

平成24年 7月12日

### 対応部局及び人員

被ばく医療総合研究所，保健学研究科，鹿児島大学医学部【教員】

### 実施の背景・目的

高汚染地区である浪江町及び南相馬市からの避難住民に対して放射性ヨウ素による内部被ばく線量を評価するため，4月中旬に甲状腺モニタリングを実施した。震災対応に寄与することを目的として，これらの活動成果を広く発信した。

### 実施概要

様々な活動成果を学術的発信することは極めて重要であることから，「Scientific Reports」誌に「甲状腺被ばくの再解析の結果について」と題した論文を発表，掲載された。また，可能な限り報道機関の取材に対応した。

具体の調査は，4月中旬に被ばく医療総合研究所放射線物理部門，保健学研究科放射線生命科学分野及び鹿児島大学医学部の教員によって，浪江町及び南相馬市からの避難住民62名に対してスペクトロメータを用いた甲状腺モニタリングを実施した。データの解析にはロシア・放射線衛生研究所及び米国・ニューヨーク大学の協力を得た。

### 効果又は結果

実測によって評価された甲状腺等価線量は安定ヨウ素剤の服用規準を超える事はなかったが，実測値から推定した小児の甲状腺等価線量では50 mSvを超える可能性を否定できなかった。これらの結果は，NHKを始め各新聞記事でも報道された。

### 今後の課題

限られた実測情報からより多くの福島県民の甲状腺初期被ばくの実態を解明する必要がある。さらに，加味されていない放射性ヨウ素-132の被ばく線量に対する寄与について検討する必要がある。

### 担当部局名

被ばく医療総合研究所



甲状腺モニタリング